

平成 21 年 6 月 12 日現在

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007～2008

課題番号：19500546

研究課題名 (和文) スポーツ・ボランティアの専門性と類型化に関する実証的研究

研究課題名 (英文) Empirical Study on Sports Volunteer's Professionalization

研究代表者

松本 耕二 (MATSUMOTO KOJI)

山口県立大学・共通教育機構・講師

研究者番号 60264983

研究成果の概要：

本研究では、スポーツ活動に関わるボランティアの専門性を活動特性や活動意識との関係性に着目し類型化を試みることを目的とした。そこで障害者スポーツを推進する国際組織にかかわるボランティアを対象とした質問紙調査を実施した。スポーツにかかわるボランティアの活動特性（業務内容、活動期間、取得資格）と専門性（活動知識、活動適応感、報酬業務）との関連を分析した結果、地域で日常かつ継続的に活動するコミュニティボランティアは、短期間、一過的な活動参加のイベントボランティアに比べ専門性意識が有意に高かった。また専門性意識には対象となる活動への興味・関心とスポーツ関連資格の有無が有意に関連していることが明らかとなり、関連資格取得がスポーツ・ボランティアの専門性に影響していることが示唆され、イベントボランティアとコミュニティボランティアの相違を確認した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	700,000	210,000	910,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
年度	0	0	0
年度	0	0	0
年度	0	0	0
総計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学 スポーツ社会学

キーワード：ボランティア、スポーツイベント、コーチ、専門性、類型化

## 1. 研究開始当初の背景

生涯現役社会、生涯スポーツ実践社会の普及・振興により、スポーツへの参与形態も直接的な「するスポーツ」のみならず、スポーツイベントなど間接的にスポーツ活

動に参加する「ささえるスポーツ」への関わりがみられる。

今日、ボランティアによる活動は、個々の積極的な社会貢献活動として営まれているが、我が国のスポーツ振興施策・計画に

においても総合型地域スポーツクラブの育成をはじめとした地域コミュニティに根ざしたスポーツにかかわるボランティアの参画が期待され、その制度的拡充や育成ノウハウの集積が求められている。

スポーツ現場レベルのボランティア需要(受け手)と供給(担い手)の実情は、従来より動員等を図ることによって相応に確保されてきたが、他方で「ボランティア」の本質となる、活動へ自発的に参加するボランティアなど、その多様性や整理や活動者に対する理解が十分になされず、受け手側からは安易な人手として軽んじられている実情も少なくない。このことは新たなささえるスポーツ活動への参加者(ボランティア)の活動参加意欲を減退させるものとしても改善されなければならない。このことは、スポーツにおけるボランティアや、そのボランティア・マネジメントに関する知識の集積が十分でなく、一偏的なボランティア観(Volunteerism; 三本松, 1994)と消極的な補助活動に終始した活動役割と組織的に有効な手だてが打てない状況にあることも影響しているといえる。

国内のボランティアに関する実証的な調査研究は、全国規模の調査(総理府、文科省、全社協他)等多数行われ、およそ4人に1人の割合で活動に参加していることなど定量的な概要は明らかにされつつあるが、活動領域をはじめ活動内容等、個々人の関わり方の多様性から他領域の活動にまたがるボランティアの全容を把握するには至っていない。翻って、体育・スポーツ領域では、SSF(1994-2000)がスポーツ・ボランティアの全国的調査を実施し基礎計量的なデータが紹介されている。さらに、スポーツのボランティアを中心とした継続性に関する研究や活動参加意識、参加動機、活動満足、

活動継続意欲等の新たな知見(山口ら:1989, 松本ら:1992, 1998, 1999, 2002, 2003, 北村ら:2001, 2004, 仲野ら:2005, ほか)が積み重ねられつつある。

スポーツにおけるボランティアの専門性については、松尾(1988)がボランティア指導者の活動継続性と没我度について言及し知見を得ているが今日のささえるスポーツとしての多様かつ多面的なボランティアを説明するまでに至っていない。ささえるスポーツとしてのスポーツ活動への参与は、今後、さらなる精緻な研究の蓄積が求められている。

## 2. 研究の目的

本研究では、スポーツ活動に関わるボランティアの専門性を活動特性や活動意識との関係性に着目し類型化を試みることであった。スポーツ・ボランティアの専門性と活動特性(対象領域、業務内容、活動期間)、活動意識(参加動機、活動満足、継続意欲)との関連を分析し、ボランティア・マネジメントのための基礎的資料を得ることであった。

## 3. 研究の方法

### (1) 調査の概要

本研究では、障害者スポーツを推進する国際組織(N)スペシャルオリンピックス日本(以下、SOと略す)の全国大会イベントスタッフ(以下、イベントスタッフ)と地区組織運営スタッフ・指導コーチ(以下、コーチ)を対象として、2008年3月7-9日に開催された全国大会のイベントスタッフと全国32地区組織から参加したコーチに質問紙と返信用封筒を留置配布し、郵送法により回収する調査を実施した。

調査内容は、個人的属性、ボランティア活動状況(頻度、業務役割)、活動意識、参加動機などの要因群によって構成されている。

配布数は1,220(イベント1,000、コーチ220),  
その結果、397名(イベント322、コーチ75)  
の有効回答(有効回答率32.5%)を得た。

#### (2) 分析方法

ボランティアが、活動内容の専門性についてどのように感じているかを計る主観的活動専門性項目(主観的活動専門性)は、「適応感(4項目)」、「活動知識(2項目)」、「報酬業務(1項目)」の3要因に分類・作成している。各項目は「まったくあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの5段階リッカートタイプ尺度で測定され評定順にそれぞれ1~5の得点を与えて数量化した。参加動機25項目についても同様に数量化し参加動機因子の抽出を行った。さらに主観的専門性得点を被説明変数、またこれらに関連すると考えられる項目(活動意識、参加動機、活動頻度、活動期間、資格有無、性別、年齢)を説明変数としてステップワイズ法による重回帰分析を行い、専門性を規定する要因の抽出を試みた。

### 4. 研究成果

#### (1) サンプルの特性

性別		イベント	コーチ	合計
男性	n	184	51	235
	%	57.5%	68.9%	59.6%
女性	n	136	23	159
	%	42.5%	31.1%	40.4%
合計	N	320	74	394
	%	100.0%	100.0%	100.0%

$\chi^2=0.71$  N.S.

サンプルは、イベントスタッフでは女性、コーチでは男性の割合が高い傾向がある。年齢層はイベントスタッフの方がコーチより若い人の割合が多い。ボランティア活動経験はコーチの方が活動経験は長く、イベントスタッフでは活動初心者の方が多く比較的経験が浅いといえる。

これらのことは従前のスポーツ・ボランティア調査研究と同様の傾向を示していることから本サンプルの妥当性が確認された。

#### 日常ボランティア活動期間

		イベント	コーチ	合計
始めたばかり	n	114	1	115
	%	36.2%	1.3%	29.5%
3ヶ月~半年程度	n	12	0	12
	%	3.8%	0%	3.1%
半年~1年程度	n	23	8	31
	%	7.3%	10.7%	7.9%
1~3年程度	n	40	14	54
	%	12.7%	18.7%	13.8%
3~5年程度	n	36	15	51
	%	11.4%	20.0%	13.1%
5~10年程度	n	46	22	68
	%	14.6%	29.3%	17.4%
10年以上	n	44	15	59
	%	14.0%	20.0%	15.1%
合計	N	315	75	390
	%	100.0%	100.0%	100.0%

$\chi^2=42.638$   $p<0.001$

#### (2) 活動満足

今大会での活動後の満足度についてみると、コーチは8割強(83.8%)、イベントスタッフでは6割強(62.6%)が満足していると回答しており、全体的にはコーチの満足度が有意に高い傾向があることがわかる。

#### 活動満足度(全体)

		イベント	コーチ	合計
非常に不満足	n	5	1	6
	%	1.6%	1.4%	1.5%
不満足	n	22	0	22
	%	6.9%	0%	5.6%
どちらともいえない	n	92	11	103
	%	28.9%	14.9%	26.3%
満足	n	153	46	199
	%	48.1%	62.2%	50.8%
非常に満足	n	46	16	62
	%	14.5%	21.6%	15.8%
合計	N	318	74	392
	%	100.0%	100.0%	100.0%

$\chi^2=13.937$   $p<0.001$

#### (3) 活動継続性

今後の活動継続では、コーチの9割強(96.0%)が継続する意向を示しているが、イベントスタッフは4割強(43.0%)、またどちらともいえないが4割強(45.9%)であった。

#### 活動継続意思

		イベント	コーチ	合計
全くあてはまらない	n	4	0	4
	%	1.3%	0%	1.0%
あまりあてはまらない	n	31	0	31
	%	9.9%	0%	8.0%
どちらともいえない	n	144	3	147
	%	45.9%	4.1%	37.9%
まああてはまる	n	85	25	110
	%	27.1%	33.8%	28.4%
非常にあてはまる	n	50	46	96
	%	15.9%	62.2%	24.7%
合計	N	314	74	388
	%	100.0%	100.0%	100.0%

$\chi^2=88.575$   $p<0.001$

活動継続に対するイベントスタッフの不確定さがあることに對し、コーチはこれまでの

実績もあるためか積極的な活動参加継続意思を示していることがみてとれる。

#### (4) 主観的活動専門性

専門性7項目の合計点および「適応感」、「活動知識」、「報酬業務」の3下位要因について、コーチの得点がイベントスタッフより有意に高いことが明らかとなった。

##### 主観的活動専門性

		n	平均値	S.D.	p.
専門性得点	イベント	318	20.726	3.747	
	コーチ	70	24.071	3.406	p<.001
(活動適応感得点)	イベント	318	3.613	0.667	
	コーチ	71	3.859	0.573	p<.01
(活動知識得点)	イベント	318	2.476	0.934	
	コーチ	70	3.414	0.860	p<.001
(報酬業務得点)	イベント	319	1.320	0.657	
	コーチ	71	1.817	1.032	p<.001

つまりコーチは、イベントスタッフに比べ、活動内容や安全管理の専門的な知識を備え、活動業務は自分にふさわしく責任を持って状況に応じた適切な内容を自主的積極的に行っており、金銭的報酬を受けとつても良いと思えるほどの業務であると認識していることが理解できる。

#### (3) 専門性に関連する要因

##### ① 参加動機

##### 参加動機得点

		S ID	N	平均値	S.D.	p.
関心	イベント	318	3.251	0.765		
	コーチ	72	3.620	0.742	p<.001	
成長	イベント	319	3.839	0.884		
	コーチ	72	4.028	0.877	n.s.	
支援	イベント	318	4.077	0.675		
	コーチ	72	3.934	0.868	n.s.	
勧誘	イベント	318	2.582	1.132		
	コーチ	72	2.028	1.003	p<.001	
報酬	イベント	319	1.440	0.561		
	コーチ	72	1.444	0.534	n.s.	

ボランティア活動への参加動機 25 項目を因子分析した結果、全分散の 47.4%を説明する 5 因子が抽出され、それぞれを動機項目から「興味・関心」「自己成長」「活動支援」「勧誘参加」「報酬」と命名した。参加動機では、関心因子と勧誘因子において有意差がみられた。コーチは、活動を通じた自己表現の手

段であり、障がい者やスポーツ、地域に関心があることやこれまでの経験や知識を活かしたいとする動機がイベントスタッフより強かった。イベントスタッフは所属先の組織や知人・友人に誘われての参加がコーチより強いことがわかった。

#### ② 専門性を規定する要因

さらに活動専門性を規定する要因をステップワイズ法による重回帰分析を試みた結果、運動やスポーツ資格の有無と活動動機の関心の2要因が抽出された。重相関係数  $r=0.550$  で説明率は 30.3% ( $r^2=0.303$ ) であった。つまり運動スポーツ資格を有しており、今回の活動対象である、障がい者やスポーツ、地域に関心があるほど、活動に対する専門的意識が高いとする結果となった。

##### 活動専門性に関連する要因

	B	ベータ	t 値	p.
(定数)	24.041		11.965	p<.001
運動スポーツ資格 <sup>1)</sup>	-3.215	-.435	-4.944	p<.001
関心(動機)	1.330	.276	3.139	p<.01
R=.550 ( $R^2=0.303$ )				

1) 数値が低い方が資格を取得していると解釈する。

#### 5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計1件)

松本耕二、仲野隆士、國本明德

障がい者スポーツをささえるボランティアの参加動機の比較 — クラブ・団体ボランティアとイベントボランティア —, 第10回日本生涯スポーツ学会, 2008/10/18, 名護市(名桜大学)

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者 松本 耕二

山口県立大学・共通教育機構・講師  
研究者番号 60264983

(2) 連携研究者 田引 俊和

北陸学院大学・人間総合学部・助教  
研究者番号 90387845